第9回研究大会（北海学園大学）の概要

西　川　博　史（大会実行委員会委員長）

環日本海学会第9回研究大会が北海学園大学を会場に2003年9月27日および28日の両日にわたって開催された。初日の27日には「北東アジア地域における協力体制の構築と安全保障」をテーマとする国際シンポジウムがおこなわれた。このシンポジウムは、環日本海学会と北海学園北東アジア研究交流センター（HINAS、略称ハイナス）の共催で、基調講演者として朝日新聞社編集局特別編集委員の船橋洋一氏をお迎えした。船橋氏は、地域における多角主義のうねりを十分に評価し、この地域においていかに画一性を避け個性を重視した多角化の枠組みを構築するかがきわめて重要なポイントで、この観点からこれまでの冷戦期の同盟関係（アメリカの特別な地位）を評価すべきであると指摘された。

基調講演の後、パネル・ディスカッションが行われ、パネリストとして、本学会と提携関係にある韓国東北亜経済学会からShim Ui-Sup（沈　義燮）氏（明知大学）、中国から陳　山氏（中国社会科学院）、台湾から林　満紅女史（台湾中央研究院）、本学会から戸沼幸市先生（早稲田大学）が参加された。沈　義燮氏は本シンポジウムのテーマにそくして「コリアン・パースペクティブ」という題目で韓国の地位と役割について意見表明された。陳山氏は「北東アジアにおける協力体制構築の理念と現実」について中国の役割を強調するとともに、北東アジア地域各国がいかにアメリカと行動をともにすることができるかがキーポイントであると指摘した。林　満紅女史は「黒潮文明経済圏における協力関係の歴史を省みて」として、黒潮を基底にする北東アジアの協力関係の歴史とそれに影響を受け続ける現在の各国のありようを示唆した。戸沼幸市氏は北東アジアの環境（自然のみならず生活）を重視した移住・共住の地域圏の構想を示され、モノ・ヒトの交流の重要性を強調された。

本大会では、学会員全体の積極的参加を求めて、事前にパネリストを募ったところ多数の応募があり、パネル・ディスカッションをめぐる全体討論の際にあらかじめこれらの方たちから意見を述べてもらうことにした。大西広氏（京都大学）は北東アジアにおける中国のますます大きな影響力を前提にいかなる理念を構築するか、吉田均氏（環日本海経済研究所）は民間と自治体を中核とする交流の場の拡大がこの地域の平和と安定に貢献することの意義を強調され、三村光弘氏（環日本海経済研究所）は朝鮮半島問題をめぐって、朝鮮国家を国際社会へ迎え入れるために何をなすべきかを問題提起された。

会場からも数多くの意見表明があり、地域の範囲、具体的な行動、信頼性の確保、人材交流の意義などをめぐって活発な討議が展開された。時間的制約から個々の事項を掘り下げるまでには至らなかったが、今後の課題であることが確認された。

第二日の学術分科会は、第五分科会（6セクション）に分かれて24の個別報告が行われた。今回は提携学会である韓国東北亜学会から8名の方がそれぞれ興味あるテーマについて報告を行った。最後まで多くの学会員が個別報告に参加された。

学会員をはじめ韓国・中国・台湾から参加された研究者たちも本大会の盛会を印象づけられたと述べていた。こうしたことは、会長はじめ理事の方々、学会事務局、報告者、コメンテータ、学会員の皆様のご協力とご援助によるものである。この紙面を借りて、厚く御礼申し上げます。